

山形県内には「日本の棚田百選」に選ばれた棚田が3カ所あり、そのひとつに朝日町「榎平（くぬぎだいら）の棚田」がある。見た目には勾配も緩く、円形競技場のような地形に、長い時間をかけて等高線に沿った形で棚田が造成され、扇を広げたという表現がピッタリな景観を創り出している。棚田百選に認定され、棚田に隣接する小高い山（一本松農村公園）一面に咲くヒメサユリも注目を集めるようになった。ここ一本松から見下ろす棚田の風景は、四季折々にその表情を変え、朝日町に住む私から見ても、とても魅力的な場所になっている。

見る側からは美しい風景であっても、見られる側となる棚田耕作者の立場からすれば、棚田はあくまでも農業生産の場であり、この景観を守りながら持続して営農するという作業の裏には、畦畔の草刈り、道路や水路の補修など、関係者のさまざまな約束事、そして苦労があるのだ。棚田は、行き止まりや軽トラック1台がやっと通れるほどの幅しかない農道、そして素掘りの水路など、ほとんどが未整備のままである。また、実際に棚田地帯に入ってみると、見た目より地形勾配がきつく、高齢化した耕作者には非常に厳しい営農条件なのだ。

山形県では、「土地改良施設や農地の保全、地域活動を企画・推進するため」各市町村に1名「ふるさと保全指導員」を配置している。私は、昨年度より朝日町のふるさと保全指導員として県から委嘱を受けている。実際の現場では、楽しいことや辛いことも同じ数だけあった。経験を重ねていくうちに、今では地域も自分も共に元気になっていくのが体感で

きるようになった。榎平の棚田保全活動も、ふるさと保全の一環として取り組んで来たものである。

活動の第一歩は、「榎平地区棚田保全活動推進委員会」の設立である。棚田の将来について真剣に語り合うための組織だ。受益者以外の人の声も聴く機会として、ワークショップを開催してみないかと県から勧められた。役員は「部外者の意見を聞くと勝手なことばかり言われてしまうから」と否定的であった。正直言って私も初めての経験だったので、もし失敗したら……という不安があった。しかし、好奇心の方が先に出て、結局取り組むことになった

VALUE SIGHT

ワークショップを行い開眼 資源価値を認識し地域づくり 田んぼを超えた榎平の棚田

棚田は一般的に水田稲作にとって条件不利地と扱われている。だが、朝日町の榎平地区の棚田はやや様子が異なる。農家以外の人も含め地域住民が棚田の将来を考えるワークショップを行い、その過程で棚田保全の決意を新たにし景観を生かす地域づくりへ発展した。棚田を素材に地域の課題解決力がパワーアップしたのである。



榎平の棚田は収穫の秋。
一望に見渡せる一本松農村公園は地域住民の総力を結集して保全

のだ。ワークショップのプログラム作成や進め方など、技術的な面について県の支援を受けながら、推進委員みんなで勉強して(洗脳されて?) いった。

第1回目のワークショップでは90人の参加を得て、各班に分かれて現地を回り、見て・聞いて・感じたことを話し合い、課題を洗い出していた。そして、みんなが納得できる形にまとめ上げた。この日、参加者に振る舞われた昼食のおにぎりは、棚田で一番刈りされた新米であった。また、それを作ってくれたのが推進

委員の奥さんたち（後に「棚田ママの会」として発足する）ということもあり、参加者に大好評だった。

第2回目は、前回明らかにされた課題をいつ・誰が・どのような方法で実践していけば解決につながるかを話し合った。こうすることによって、参加者全員が同じ思いで、棚田の未来を考えることができたのだ。こんなやり方は初めての経験だったし、まるで魔法にでも掛けられたようだというのが正直な感想である。

3回目以降は推進委員が中心となり『棚田保全マップ』を完成させた。

村山



水土里ネット朝日町
佐藤美和子

昨年12月には、県内全域から250人の参加を得て「棚田フォーラム」を開催した。棚田の神様「早稲田大学名誉教授の中島峰広先生」の基調講演と椹平保全活動の報告という内容だ。参加者の昼食は、もちろん『棚田米のおにぎり』を中心にした手づくりメニューだ。この昼食を提供するために、「棚田ママの会」が発足したのだ。

改めて考えてみると、成果の発表会というよりも保全活動に対する決意表明の会であったような気がする。

そして今春、早速実践活動が始まったのである。

最初の取り組みはトイレの設置だ。中古の現場仮設トイレ2基を購入し設置することができた。

2つ目は、棚田を別の角度から観ることのできる

第2展望台の整備である。区と協同し地域全体に協力を呼びかけた。立木を伐採し、それを片付けた。切り倒した木でベンチを作る者、重機で駐車場を造成する者。地域には実にさまざまな技術者が居ること、そして農村集落の結束力と底力を感じた。

3つ目は、一本松公園にヒメサユリを植栽・管理している多くの地区住民から望まれていた『ひめさゆり祭り』の開催である。「棚田ママの会」も大活躍だ。これに影響され、「いきいきクラブ(地区の熟年お母さんの会)」も加わって自慢のご馳走を作り、参加者と仙台方面からバスで訪れた観光客やカメラマンなど全員に振る舞われた。見る側・見られる側が初めて一緒になったイベントが開催されたのだ。2年前には考えもしなかったことが、住民の手によって短期間で計画・企画され、それが平気で実践され現実のものとなった。農家や非農家など関係なく、いつの間にか巻き込まれ、活動に参加しているのだ。こんなことが、なぜ可能となったのだろうか？振り返ってみると、ワークショップという仕掛けを借りて、ポンヤリしていた気持ちをひとつの方向にまとめ上げていくことができたのだ。そして何より大事なことは、夢を計画に、計画を実践に結びつけるということだ。その後には、活動の継続とか管理とか、新たな課題が生まれて来るのは当然のことだが、そこから逃げていたのでは、いつまで経っても地域は変わらないのだと思う。きっと、誰かに作らせられた計画ではないということが、自然な形で地域に受け入れられた要因なのだろう。この活動に取り組む前は、棚田の条件不利の解決手段をすべて行政や誰かに頼っていたと思う。自分たちができることから取り組んでみようという気持ちが生まれる、そんな健康な体質に変わった感じを持った。そして今は、この活動で得た、元気や効果をもっとたくさんの地域に経験してもらいたいと、心から願っている。

佐藤 美和子（さとう・みわこ）

水土里ネット朝日町（朝日町土地改良区）会計主任。
1959年8月、山形県朝日町生まれ。
山形県ふるさと保全指導員。
山形県消費生活啓発員。
〒990-1442 西村山郡朝日町大字宮宿1115
朝日町役場第二庁舎内 水土里ネット朝日町
TEL 0237-67-3616